【書く・なぞる】俳句　正岡子規　一

柿食へば　鐘が鳴るなり　法隆寺

いくたびも　雪の深さを　尋ねけり

春や昔　十五万石の　城下かな

糸瓜咲て　痰のつまりし　仏かな

鶏頭の　十四五本も　ありぬべし

シニア脳トレラボ

【書く・なぞる】俳句　正岡子規　二

今朝の秋　何やらゆかし　すゞむしよ

松の葉に　かかるしらゆき　見て通る

葛の花　踏みしだかれて　色あたらし

痰一斗　糸瓜の水も　間にあはず

大根引　大根で道を　教えけり

シニア脳トレラボ

【書く・なぞる】俳句　正岡子規　三

鰯雲　人に告ぐべき　ことならず

竹の春　沖のかもめに　月ささず

雪残る　頂ひとつ　国境

野菊咲く　野はありのまま　夕日かな

鶯の　鳴くやさびしき　桜ちる

シニア脳トレラボ

【書く・なぞる】俳句　正岡子規　四

くれなゐの　二尺伸びたる　薔薇の芽の

夜やすらふ　富士の煙の　うすれゆく

糸瓜咲き　病名は死と　診定しけり

幾山河　越えさり行かば　寂しさの

曼珠沙華　どこまで行っても　道の果

シニア脳トレラボ